

教師が探究心を身につけるための環境要因の分析

—高等学校における PBL 実践を事例に—

酒井 朝羽 教職基盤形成コース

キーワード：探究心, PBL, 総合的な探究の時間

1. 問題の所在と研究目的

平成 30 年高等学校学習指導要領改訂により、「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」に変わり、高校では「探究学習」の実践が行われている。しかし、探究学習をどのように設計すればよいか分からず困惑している教員が多くいる。吉村・真野（2018）は教師や学習者の中には、「証明は先生が黒板に書くものであり、生徒はそれをノートに写す」「先生が授業で提示する問題には、必ず一つの答えが存在する」といった暗黙的ルールが存在するため、そうしたルールは議論の余地のない前提となっていることが多いとし「教科横断的な探究型学習は、従来の学習観や指導観の中では実現が困難である」（p.49）と述べている。

こうした課題から、本研究では生徒の「探究学習」を実施する教師の役割に注目した。苫野（2019）は教師を「共同探究者」「探究支援者」と呼んでいる。また、今井（2016）は「探究人を育てるには自分が探究人になるしかない」（p.224）と述べている。生徒が探究的に考え学ぶ姿勢を育成するためには、探究を行う教員自身が、探究とは何かを認識し、探究を面白がることのできる「探究心」が必要ではないか。本研究は、探究を実践する教員がどのように「探究心」を身につけていくのか、その環境要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、公立 X 高校の教員を対象として調査を実施した。X 高校では、2019 年度より NPO 法人青春基地と連携協定を結び、学校と NPO が協働して「総合的な探究の時間」の授業づくりに取り組んでいる。この授業では、Project Based Learning (PBL : プロジェクト型学習)を行う。PBL の定義は様々あるが、苫野（2019）は『『プロジェクト』という言葉は、この『探究』を駆使するための方法概念』（p.105）と述べ、PBL の方法を①テーマ②問い③方法④発表の 4 つのステップを行きつ戻りつしながら進んでいくと説明している。そのうえで NPO では、「PBL とは、生徒自身の興味関心 (Will) からプロジェクトのテーマを決め、文献調査やフィールドワークなどのアクションを通して学ぶこと」と定義している。フィールドワークでは、学校内にとどまらず、校外に出て調査することで様々な角度から情報収集を行う。高等学校学習指導要領の説明では、「探究学習」は「①②③④の過程を固定的に捉える必要はない。物事の本質を探って見極めようとするとき、活動の順序が入れ替わったり、ある活動が重点的に行われたりすることは、当然起こり得ることだからで

ある」(文部科学省, 2018, p.12) とあるように、流動的であり、校外に広がる学びである。

しかしながら、X 高校では「探究学習」を担当する教員たちから多くの反発の声が出てきた。NPO から教員に対して、生徒に合わせて臨機応変に対応してほしいとお願いすると、「授業のやり方を綿密に決めてほしい。1 週間前にはきっちりと授業の内容を決めたい」と固定的な学びを設定してほしいという声があがり、「インタビューに行くならきっちりと調べて準備したいからまだ早い」と校外に出ることを生徒に促そうとしない教員が多くいた。

そうした中で、A 教諭の変容は特徴的だった。探究学習の担当だった A 教諭は、授業が始まった 2019 年 4 月当初、授業をどのように設計するかに関する発言が多くあった。授業のやり方にこだわっていた A 教諭が、1 年間の授業を振り返るとき、探究学習の面白さを語るように変化した。まちあるきの面白さを何度も語り、「知らないところで偶然に出会う学びって大事ですね」と話していた。探究学習の面白さを語るようになった A 教諭には探究実践に必要な「探究心」が身についたのではないか。そこで、本研究では、A 教諭、A 教諭と共に探究学習の担当を勤めた B 教諭、2020 年度探究学習の担当を勤める C 教諭、2019 年度、2020 年度と授業に参加している D 教諭の 4 人に半構造化インタビューを行った。1 人当たりのインタビュー時間総計の平均は、約 45 分であった。

表 1 研究協力者一覧

名前 (性別)	年齢	教職歴	探究学習の担当経験年数
A 教諭 (男性)	30 代後半	7 年	1 年
B 教諭 (男性)	30 代後半	10 年	5 年
C 教諭 (男性)	50 代前半	30 年	1 年
D 教諭 (女性)	50 代後半	30 年	2 年

調査で得られたデータは TEA (Trajectory Equifinality Approach=複線経路・等至性アプローチ) を用いて分析を行い、TEM 図 (図 1) を作成した。TEM 図とは、人間の発達や人生経路の多様性・複雑性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルであり (荒川ら, 2012), 時間的変容の過程を分析する。本研究では、教員が「新しいものを受け入れ、探究を面白がる」を等至点と設定した。

3. 結果

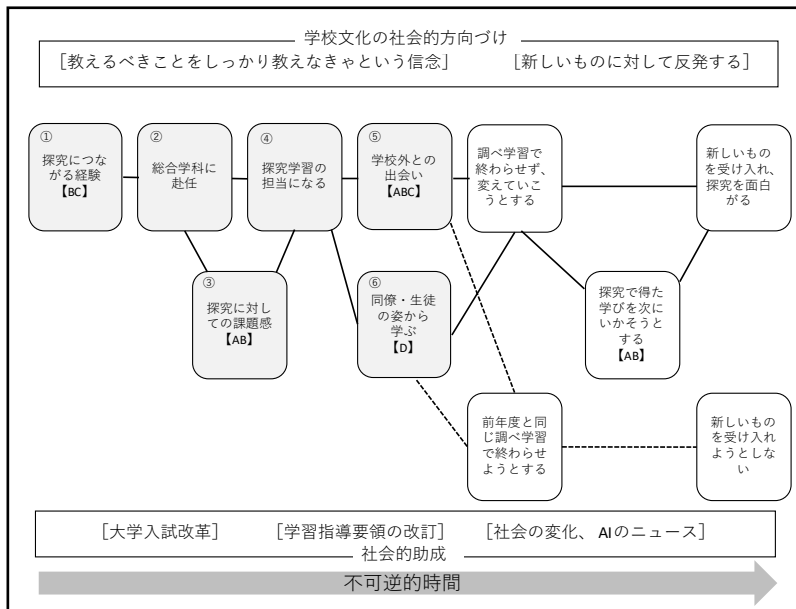
TEM 図を分析した結果、三つの必須通過点が明らかとなった。以下、必須通過点について説明する。

調べ学習で終わらせず、変えていこうとする

B 教諭「調べ学習で終わりにはしたくないなあっていう思いもあったので、校長が青春基地って人たちがいてっていう話を聞いた時は、すごくいいなと。そういう人たちの力借りて、

もっと調べ学習で終わらない探究にしたいなと思いました。」

図 1 インタビューより作成した TEM 図



また、いくつか見えてきた経路の概念に関して、説明をする。

探究につながる経験

C 教諭「自分自身の経験で言うと、大学時代のゼミってこんな感じなんだろうなって。限られた専攻分野の中で自分の興味関心を持つことをテーマに立てて論文を調べてきて場合によってはフィールドワークをやって一つの方向性を出して発表していくわけじゃないですか。高校の段階で大学レベルまでいかないけれど、それをやろうっていうのが探究なのかなってちょっと感じるのね。」

探究に対する課題感

B 教諭「やっぱり調べて終わっちゃう子が多いんですよね。それだったら意味ねーなって。(中略) 探究の、多分、探究を設定している、例えば文科だとか、そういうところが考えていることは、そのためじゃないなっていうのがあると思うんですよね。」

学校外との出会い

A 教諭「今までの枠の外側に連れてもらえたな連れ出してもらったなっていう感覚がすごいです。例えば 4 月頭にあったまちあるきなんか特にそうだったし、今までのうちの学校の探究活動って、図書館の本を調べる、インターネットっていうところに終始しがちだったんですが、それをいきなりこうぐいっと外に連れてってもらえて、人に会わせてもらう機

会を作ってもらえたっていうのはすごい課題探究の、何だろう。世界って言うか領域って言うかそれが一と広がった。」

同僚・生徒の姿から学ぶ

D 教諭「M 先生はずっとこの学校で何年も探究っていうか総合の時間を担当されてきていて、すごいんだよファイルとか過去の。」

「普段は話ができないような食の学校、大学、食の先生と生徒が話してるのを見るとやっぱり大変なんだけど気を使うからね。だけど面白いかなと思うし。」

探究で得た学びを次に生かそうとする

B 教諭「全部授業ひとつとっても探究だと思うんですよ。(中略)生徒がわかる授業をつくるにはって言うことで考えていて。だから本当に、何をするにもその人が自分で物事を回す時には必要な必要になってくるのが探究の力、探究ってことだと思うんですよ。」

4. 総合考察と今後の課題

教員が探究心を身につけるための環境要因として、6つの要因が明らかになった。すなわち、①探究につながる経験、②総合学科への赴任、③探究に対しての課題感、④探究学習の担当になる、⑤学校外との出会い、⑥同僚・生徒の姿から学ぶ、である。教員の探究心を育成するために②④の手立てとして重要となるのが③の視点である。現状の探究学習に課題があると感じている教員を総合的な探究の時間が重視される学校に赴任させたり、探究学習の担当に任命したりすることで、教員の探究心を身につけることができるのではないかと

本研究の場合、主に学校外からのアプローチを行った。外部アプローチは⑤にもあるように探究心を身につける一要因となる。しかし、X校の事例のように反発が起き、探究学習を実践しにくい状況となる場合がある。外部との出会だけでなく、①②③④⑥の環境を作っていくことが重要である。特に⑥に関しては、学校内で実践に関して話したり生徒の様子を共有したりと、同僚同士が話す場を設けるなどの工夫をすることが必要なのではないかと

文 献

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012). 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例. *立命館人間科学研究*, 25, 95-107.

今井むつみ (2016). *学びとは何か—<探究人>になるために*. 岩波新書.

菅野一徳 (2019). *「学校」をつくり直す*. 河出書房新社.

文部科学省 (2018). *高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編*.

吉村俊太・真野祐輔 (2018). インターネットを利用した教科横断的な探究型学習の可能性: 小学校教員志望者を対象とした教授実験の報告. *日本科学教育学会研究報告*, Vol.33 No.3, 49-54.